

ポストフェミニズムとしてのトランス？

—— 千田有紀「「女」の境界線を引きなおす」を読み解く

藤高和輝
(京都産業大学)

本論文は、千田有紀の論考「女の境界線を引きなおす」を批判的に読み解くことを通して、現代の日本社会におけるトランス排除的言説の構造を明らかにすることを試みるものである。千田の論考は2020年3月に出版された『現代思想』臨時増刊号「フェミニズムの現在」に掲載されるや否や、トランス当事者を含めた多くの人たちからトランス排除的な論考であると批判され、物議を醸したものである。本稿では、千田の論考を読解することを通して、その背後にあるトランスフォビックな認識論的枠組みを明らかにする。その枠組みとは「ポストフェミニズムとしてのトランス」という図式である。そして、その図式が千田個人だけではなく「トランス排除的ラディカル・フェミニズム」に広く共有されている可能性を提起する。以上を通して、現在のフェミニズムが抱える問題点を浮き彫りにし、インターセクショナルな視点をもったトランス・インクルーシブなフェミニズムの必要性を主張する。

キーワード

トランス、想像的逆転、ポストフェミニズム、LGB fake-T、インターセクショナルリティ

「フェミニストは人種、階級、セクシュアリティ、障害といった区別を学んできたし、擁護してきた。それでは、このアポリアはなぜ、ジェンダーの領域では頑なに存続しているのか。」

(Salamon 2010=2019: 207)

I. はじめに

2020年3月に出版された『現代思想』臨時増刊号「フェミニズムの現在」に掲載さ

れた千田有紀の論考「「女」の境界線を引きなおす」が物議を醸した。2018年夏頃のお茶の水女子大学のトランス女性受け入れの報道以降 Twitter を中心に「トランス排除的ラディカル・フェミニズム (trans-exclusionary radical feminism)」の言説が活発になり氾濫するなかで出版された千田の論考は、この間トランス排除的な言説によって傷つけられた多くの人たちに大きな失望を与えるものであり、そのためトランス

ジェンダー¹ 当事者を含めた多くの人からの批判を受けた。例えば、トランスジェンダー当事者であるゆなは千田の論考をかなり詳細に取り上げて批判した(ゆな 2020)。これに対して、千田はゆなに応答し、彼女の解釈は「誤読」であるとして、むしろ「女」というカテゴリーを生物学的な本質主義から解放し、「共闘」しようという、トランス女性へのメッセージでもある」と述べた(千田 2020b)。

しかし、そうであるならば、なぜ、トランスジェンダー当事者を含めた多くの人たちから「トランス排除的」との批判を受けたのか。その論考の何が問題だったのか。私たちは改めて考える必要があるだろう。そして、そこで考察されるべきは、千田自身の「意図」ではなく、そのテキストがどのような認識の枠組みによって可能になっているかという問いであり、その認識論的な構造を明らかにするために、テキストが語っているもの——「作者」にとっては「枝葉末節」に映るものさえ含めて——を批判的に読み解く必要がある。

したがって、本稿は千田の論考「女」の境界線を引きなおす」を批判的に読解するものである。しかし、その狙いは千田個人を批判することにあるわけではない。また、千田の論考を「正確に」読み、その「意図」を理解することにあるわけでもない。ましてや、「中立的立場」から「論争」を整理することにあるわけでもない。むしろ、私がここで千田の論考を読解すること

で行いたいのは、千田個人だけではなく、広く「トランス排除的なフェミニズム」に通底している認識論的な枠組みとは何かを明らかにする作業である。したがって、その論考を批判的に読み解くことはひとり彼女の論考が抱える問題を指摘することに留まるものではない。それは「フェミニズムの現在」が抱える問題を考察することであり、引いては「フェミニズムの未来」を考える作業につながるだろう。

そのためにまず第一節では、「想像的逆転」という概念を用いながら、千田の論考の全体的な構造を確認する。その上で第二節以降では、本論の主題へと議論を進める。そこで私が着目したいのは、千田の論考から浮かび上がる「ポストフェミニズムとしてのトランス」という認識論的な図式である。第二節では、千田の論考を内在的に読解することを通して、この図式を析出する作業を行う。第三節では、このような「ポストフェミニズムとしてのトランス」という図式に関する一種の系譜学を行うことで、「トランス排除」の問題が現在のフェミニズムに突然降って湧いた問題ではなく、むしろ歴史的に反復された問題でもあることを確認する。そこで取り上げたいのが、ジェンダーフリー教育をめぐる生まれた「中性人間」に関する議論である。第三節が「ポストフェミニズムとしてのトランス」と「中性人間」というそれぞれの言説の共通性を考察するものであるなら、第四節で考察するのはむしろ現在生じてい

1 本稿では、トランスジェンダー(あるいはトランス)を「出生時に割り当てられた性別に違和感を持ち、それとは異なる性を生きる人」を指す言葉として用いる。なお、「シスジェンダー」とは「非トランスジェンダー」を指す言葉で、「性別違和をもたない人」を指す。

る差異や変化の方であり、そこではジェンダーフリー・バッシングの時代から現在においてトランスをめぐる言説の状況がどのように変化したのかを考察する。

II. 「[女]の境界線を引きなおす」と「想像的逆転」

まず、千田の論考を読み解いていく上で、その論考の全体的な構造を確認しておこう。ここで確認しておきたいのは、「トランス排他的ラディカル・フェミニズム」の言説が「想像的逆転」に構造化されており（藤高 2019a）、千田の論考も例外ではないことである。「想像的逆転（imaginary inversion）」とは、マイノリティの立場に置かれている主体がどういうわけか「暴力的主体」として表象されるメカニズムを指すものである²。トランス排除の文脈で言えば、トランスジェンダーはこの社会のなかで周縁化されており、例えば性暴力を受けることも多いにもかかわらず、むしろ「性暴力を行う可能性のある主体」として表象されている点がそれである。本節でまず確認しておきたいのは、そのような「想像的逆転」のメカニズムが千田の論考にも働いているという点である。

彼女の論考は「いま、日本のTwitterでは「ターフ戦争」とでもいうべき事態が起こっている」という言葉とともに始まり、

（「トランス排他的ラディカル・フェミニスト」の略語である）「ターフ」という用語が現在「中傷の言葉」として、「侮辱や暴力的なレトリックとともに使われている」と説明される（千田 2020a: 246）。このように、彼女がはじめからクローズアップしているのは、「ターフ」という言葉が「中傷の言葉」として用いられていると彼女が考える状況であり、その目的は、それによって生まれる「不必要な（と私は信じている）争い」（千田 2020a: 247）に終止符を打つためである。すでに、この冒頭部から透けて見えるのは、一部のフェミニストに向けられる「ターフ」という言葉が「中傷」や「暴力」として機能しており、したがって、そのような暴力からフェミニストを守ろうという問題意識である。彼女にとって、「ターフ」とは、トランスの活動家やトランス・アライによる、一部のフェミニストを攻撃するための用語である、と言えるだろう。そこでは、トランス活動家やトランス・アライは、フェミニストに対する「暴力的主体」として表象されている。

このような構図は結論部ではより明白になる。彼女はその結論部で、トランス（かもしれない人）の「破壊行為」（千田 2020a: 254）に言及する。

先に例に出したバンクーバーの女性

2 「想像的逆転」とは“imaginary inversion”の訳語である。その働きに関しては、ジュディス・バトラーがロドニー・キング事件を例に考察している（Butler, 2004a）。ただし、この論文に直接“imaginary inversion”という表現は出てこない。この表現を用いたのは酒井隆史であり、彼はバトラーの論文も挙げながらその概念について論じている（酒井, 2016）。しかし、彼はそれを「想像的転倒」と訳している。本稿では“inversion”の訳語として「逆転」の方がわかりやすいと考え、「想像的逆転」と訳して用いている。

センターが破壊された事件では「ターフを殺せ」「ファックターフ」「トランスパワー」という落書きが施設に対して行われた。その数週間前には、ネズミの死骸がドアに釘づけられていたという。これが誰によってなされたかはわからない。トランスはたんに、破壊行為の口実として使われている可能性すらある。しかし、ターフはある種のステイグマとして機能しており、ターフに対しては何をしてもいいのだという意識が醸成されていることも事実である。

例えば、terf(s) に rape、fuck、punch などという言葉を引き付けて検索すれば、目を覆うようなニュースや写真が出てくる。サンフランシスコの公立公園では、「ターフをぶん殴る I PUNCH TERFS」と血塗られたタンクトップが展示された。ほかにも、斧とともに「死ね、シスのカスども Die Cis Scum」というスローガンが描かれたシールド、なかには有刺鉄線をまかれたものもある色とりどりのバッド、これまた色とりどりの斧やトンカチ、などが展示された。これらは主催者の HP 上で通信販売されており、こうしたバッド（や刀、斧）などの武器を携えて「ターフ」をしばくと宣言する写真は、SNS 上でしばしばみられる。（千田 2020a: 254）

このように彼女は最後に、トランス（かもしれない人）による「破壊行為」に言及する。このような言及の仕方によって生み出される効果は、トランスは「危険な人」なのだという印象ではないだろうか。たとえ彼

女に「差別意識」がなくとも、このような操作は明らかに読者に、トランスを「危険人物」とみなすよう誘導するものである。

先の引用部の直後に続くのは、この論考の最終段落にある次のような彼女の主張である。「このような暴力に陥ることなく、私たちが多様性に基ついた社会を設計するには何が必要なのだろうか。今一度立ち止まって、私たち全員が考えてみる必要があるのではないだろうか。それは「ターフ」を見つけ出して、制裁を加えることではなく、問題の構造を見据えた私たちの社会的合意の達成によってなされるものであると信じている」（千田 2020a: 254）。「多様性に基ついた社会」は「私たちの社会的合意の達成によってなされるものである」と、彼女はその論考を締め括る。このような提言は特段問題のない主張に思えるかもしれないが、しかし、ここで着目すべきは、この提言が先の引用部の直後に置かれている点である。すなわち、先の引用部と併せてこの最後の主張を読むなら、「社会的合意の達成」を妨害しているのはトランス及びそのアライの側だ、と彼女が想定しているのは明白なのである。あるいは言い換えれば、たとえ彼女にそのような「意図」がなかったとしても、結果として、彼女の主張は読者にそのような「効果」を与えるものである。

このような、トランスが「私たちの社会的合意の達成」を妨害する主体として表象されている点に関して言えば、次のサラ・アーメッド（Sara Ahmed）によるトランス排除の分析が見事に当てはまっていると言えるだろう。アーメッドは論文“An Affinity

of Hammers”で、「私たちは本当に話し合うことができないのか」という希望に満ちたりべらな問い」さえトランスに対する「殴打」になりうると述べている (Ahmed 2016: 31)。というのは、「そのような問いは、この問題の話し合いに参加することを拒絶する人々を、不和の原因にしてしまうからだ。そのため、圧力をかける「トランス活動家」、話を聞かず、関わろうとしない「トランス活動家」、フェミニストの批評をブロックするために「トランスフォビア」という言葉を使う「トランス活動家」たちは、和解というリベラルな約束 [.....] を邪魔する人とみなされてしまうのだ」 (Ahmed 2016: 31)。千田の提言は明らかに、トランスを叩くハンマーとして機能していると言えるだろう。そこでは、トランスは「和解というリベラルな約束 [.....] を邪魔する人」として表象されているのだ。

したがって、トランスという形象は千田の論考において、「破壊活動」を行う暴力的主体として、そしてまた「私たちの社会的合意の達成」を妨害する主体として、表象されていると言える。社会的混乱を引き起こしているのは彼女にとってトランスの側なのであり、一部のフェミニストの「不安」に寄り添わないのもトランスの側なのだ。そこには明らかに、「想像的逆転」のメカニズムが働いていると言えるだろう。

Ⅲ. ポストフェミニズムとしてのトランス

このような「想像的逆転」に貫かれた千田の論考はまさにそのために、多くの人から批判されることになったが、本節では、それらの批判のなかでもあまり注意を引か

なかった点を考察することにした。それは、千田がトランスを「ポストフェミニズム」に「親和的」な主体として描いている点であり、まさにそこにこそ、トランス排除的なフェミニズムの認識論的枠組みが透けて見えるように思われるからである。

順を追ってみていこう。彼女はトランスジェンダーを「ポストフェミニズム」に「親和的」な主体として表象する上で、ジェンダー論の歴史を三期に分けて説明する。この「ジェンダー論の第三段階」なるものはジェンダー研究者にとっても「新奇」なものであるが、ここでは千田によるジェンダー論の整理を確認しておくに留める。トランスジェンダーは千田によれば、このジェンダー論の「第三期」に位置づけられる。以下、彼女の整理をみていこう。

千田によれば、ジェンダー論の「第一期」は、「ジェンダー」という概念が出現した時期」(千田 2020a: 250)であり、ロバート・ストラー (Robert Stoller) やジョン・マネー (John Money) らの名が挙げられる。そこでは、「身体」は不可視化され、ジェンダー・アイデンティティやジェンダー・ロール [.....] が社会的に創造されることが焦点になった」(千田 2020a: 250)。「第二期」では、ジュディス・バトラー (Judith Butler) の名が挙げられている。そこで彼女が述べているのは、この「第二期」において「身体」までも社会的に構築されているのだという考え方」(千田 2020a: 251)が波及したということである。そして、「第三期」はこの「第二期」の考え方をさらに推し進めたものであるとされ、「身体もアイデンティティも、すべては「フィクショ

ン」であるとされるのであったら、その再構築は自由におこなわれるべきではないかという主張」(千田 2020a: 251) にまとめられる。

ここで重要なのは、トランスジェンダーがこの「第三期」の考え方に則ったものであると考えられている点である。彼女曰く、「これはトランスに限らない。美容整形やコスメ、ダイエット、タトゥーなどの身体変容にかんする言説を検討すれば、身体は自由につくりあげてよい、という身体加工の感覚は私たちの世界に充満している」(千田 2020a: 251 強調引用者)。あるいは、「たまたま、「割り当てられた」身体やアイデンティティを変更して何の不都合があるだろうかという論理は第三期的ななにかである」(千田 2020a: 251 強調引用者)。このように、千田はトランスジェンダーを、「第三期的ななにか」によって生み出された存在、あるいは「第三期的ななにか」と密接に関連している存在として捉えていることがわかる——千田自身はこのような「第三期的ななにか」とトランスの関連を否定しているが(千田 2020b)、傍点を付した箇所は明らかにトランスを想起させる記述である。

このようなトランスジェンダー理解が明らかに不正確かつ不十分であるのは、すでに先に触れたゆなによる論考でも指摘されている。例えば、彼女は次のように述べている。「私たちトランス女性は不自由にも、自分たちにもどうしてもできない仕方

ですが、そのひとつもまた、男女二分法の外部に

いることを自ら自由に選んだわけではなく、おそらく当人にもどうしようもない仕方

方でいずれの性別にも属せないのだろうと想像します」(ゆな 2020)。トランスにとってのアイデンティティは自由に選択したり再構築したりする代物ではない。それは語の厳密な意味で感じられるものである(トランスの経験をこのような「感じられる」という観点から考察したものとして、拙論(藤高 2019b)を参照)。

さて、ここで私が焦点を当てたいのは、この「第三期的ななにか」が「ポスト・フェミニズムの時代と親和的である」(千田 2020a: 251) という彼女の次のような主張である。

こうした感覚〔身体やアイデンティティは自由に再構築されるという感覚：引用者注〕は、ポスト・フェミニズムの時代と親和的である。男女平等は、現実には達成されていない。男女の賃金格差から女性の政治参加から、不平等はそこかしこにある。なんとい

っても日本のジェンダーギャップ指数は一二一位である。しかし、にもかかわらず、男女平等は達成されたという前提で、様々な問題を個人の「選択」や「責任」に帰する時代が、ポスト・フェミニズムである。男女の差はあたかも消滅し、男女平等がすでに達成されたかのように扱われる。[.....] ここでは、男女平等を主張するフェミニストは、自ら「女」というジェンダー・アイデンティティを「選択」したにもか

かわらず、その結果が気に入らない、不平等だと、「性別」というカテゴリーを利用して文句をいう人たちにすりみえる。自分の「自由な」「選択」にもかかわらず、「性別」などという窮屈なカテゴリーを改めて持ち出して、自己正当化のためにひとびとを「性別」に押し込めてくるひとたちとすら表象される。(千田 2020a: 251)

彼女によれば、ポストフェミニズムとは「男女平等は達成されたという前提で、様々な問題を個人の「選択」や「責任」に帰する」ものであり、そして、それは、「フェミニスト」に対して「自己正当化のためにひとびとを「性別」に押し込めてくるひとたち」と非難するものであるから、要するに反フェミニズムであり、フェミニズムに対するバックラッシュである。トランスを含む「第三期的ななにか」は彼女にとって、ポストフェミニズムであり、フェミニズムに対するバックラッシュなのである(千田はジェンダー論の各々の「段階」は「理念系」にすぎないと断っているが(千田 2020a: 251)、しかし、「第三期」をポストフェミニズムに「親和的」と表象している点で明確に価値判断を下している)。

ここから、「ポストフェミニズムとしてのトランス」という構図が彼女の論考から浮かび上がることになる。トランスジェンダーは「たまたま、「割り当てられた」身体やアイデンティティを変更して何の不都合があるだろうかという論理」によって規定され、その感覚／論理は「第三期的ななにか」であるとされる(千田 2020a: 251)。こ

の「第三期的ななにか」が「ポストフェミニズム」と「親和的」とされるのは、それが「性別」という「社会的な問題」を「個人の選択の問題」に還元するものだからであり、それはフェミニズムを攻撃するものと想定されている。「トランスジェンダー」とは彼女にとって、「第三期的ななにか／ポストフェミニズム」の象徴的な例であり、フェミニズムの基盤と考えられているもの——要するに、性別——を瓦解させる存在として想像されているのだ。

重要なのは、この「ポストフェミニズムとしてのトランス」という図式が程度の差はあれ「トランス排除的なフェミニズム」に共通して認められる点である。実際、「トランスジェンダーの存在を認めれば女性の権利や安全が守られない」といった類の主張はとりわけネット上でよく見かけられる。そこでは、トランスジェンダーは「女性の安全」や「フェミニズムの基盤」を脅かす「脅威」であると想像されている。トランス排除的言説においてたびたび話題になる銭湯やトイレの議論で問題になっているのは「トランスジェンダーの存在を認めれば、トランス女性を装う性犯罪目的の男性の存在も許してしまう」ということであるが、このような認識の背景には、「トランスジェンダーの存在を認めれば、二元論的な性別そのものが瓦解してしまう」という「不安／恐怖」があるのではないだろうか。

ここで、千田の論考以外の例を取り上げよう。それは、杉田水脈の物議を醸した文章「[LGBT] 支援の度が過ぎる」である。ここでは、その文章を千田の論考との共通点に着目しながらみていこう。両者のテク

ストの興味深い共通点とは、その「性同一性障害者／トランスジェンダー」の位置づけである。千田の論考において、「性同一性障害／トランスジェンダー」はあの「ジェンダー論」の「第二期」と「第三期」にそれぞれ割り振られている。彼女は次のように述べている。「『ジェンダー・アイデンティティ』は生まれながらにして所与であり、変更不可能であるからこそ、手術によって身体を一致させたいというGIDをめぐる物語が典型的に第二期的なものであるとしたら、たまたま、「割り当てられた」身体やアイデンティティを変更して何の不都合があるだろうかという論理は第三期的ななにかである（どちらが優れていると断言しているのではない。これらは理想型であり、現実には両者の論理はもちろん混在する）」（千田 2020a: 251）。トランスの存在をこんな風に理論によって分断してみせるのかなり暴力的だが、「どちらが優れていると断言しているのではない」——そんなことは当たり前である——と述べながら、しかしすでに指摘したように、「トランスジェンダー」は「第三期」の「産物」とされ、そしてこの「第三期」は「ポストフェミニズム」に「親和的」なものとして描かれるのだから、彼女は明白に、「性同一性障害者」よりも「トランスジェンダー」を問題視しているのである。そして、このような彼女の「性同一性障害者／トランスジェンダー」の区別は、杉田の論考「『LGBT』支援の度が過ぎる」で表明されているものとはほぼ一致する。杉田は「LGBT」に税金を使うべきではないと主張したことで批判されたが、「性同一性障害」は「障害」だから

「医療を充実させるべき」とも主張している（杉田 2018: 59）。しかし他方で、「自分が認識した性に合ったトイレを使用することがいいことになるのでしょうか」と問い、「Tに適用されたら、LやGにも適用される可能性だってあります。自分の好きな性別のトイレに誰もが入れようになったら、世の中は大混乱です」（杉田 2018: 60）とも述べており、明示的に「トランスジェンダー」を攻撃している。

もちろん、千田は杉田の政治的立場に賛同しないだろう。しかし、ここで着目したいのは、「性同一性障害／トランスジェンダー」をめぐる奇妙な図式が両者において共有されている点である。杉田にとって、「性同一性障害」は「障害」だからやむをえないが、「T」と略語で呼ばれているものは「自分の好きな性別を自由に選ぶことができる主体である。千田の論考においても、「GID」は「『ジェンダー・アイデンティティ』は生まれながらにして所与であり、変更不可能である」というそのやむにやまぬ状態によって規定されており、その表象は「たまたま、「割り当てられた」身体やアイデンティティを変更して何の不都合があるだろうかという論理」によって規定される「トランスジェンダー」と対照的である。

杉田の「自分の好きな性別のトイレに誰もが入れようになったら、世の中は大混乱です」という世界観はまさに「ポストフェミニズムとしてのトランス」という認識論的図式によって可能になっている。「ポストフェミニズムとしてのトランス」は、身体やアイデンティティを自由に再構築し、性別を「個人の選択の問題」に変え

る存在だからだ。その図式の下では、あたかも、トランスジェンダーの存在を社会的に認めることが即、性別を解体することを意味するかのような、一種の陰謀論的な議論が展開されていくことになる。

IV. 「トランス」から「中性人間」へ

千田の論考からみえてきたのは、「ポストフェミニズムとしてのトランス」という形象だった。そこではトランスジェンダーは、身体や性差を自由に再構築することのできる存在、いわば「性差をなくす」存在であり、フェミニズムに対するバックラッシュとして表象されていた。ここで私は千田の論考からいったん離れて、このような「ポストフェミニズムとしてのトランス」の「前例」を考察することにしたい。それによって、千田の論考が抱える問題がなにも突然噴出した新たな問題ではなく、過去のフェミニズムの負の遺産を継承したものであることを確認したい。そこで思い起こされるのが、ジェンダーフリー教育をめぐる肯定派と否定派の議論であり、両陣営から排除された「中性人間」という形象である。

風間孝はその論文「『中性人間』とは誰か? ——性的マイノリティへの「フォビア」を踏まえた抵抗へ」で、ジェンダーフリー教育をめぐる肯定派・否定派双方の言説に共通している「中性人間」の排除について考察している。「中性人間」という形象はジェンダーフリー教育否定派の言説から生まれたものである。風間は、当時の民主党議員の中山義活の国会質問を否定派の典型的な言説として分析し、次のようにまと

めている。

ここで、中山の主張にみられるジェンダーフリー批判を行うための二重の戦略を読み解き、それがひとつの典型であることを指摘したい。その戦略とは、つぎの二つからなる。①ジェンダーフリー教育を、性差を否定する教育として批判をおこない、その結果「中性人間」が生まれることになることを主張する。②その一方で、ジェンダーフリー教育批判をおこなうときの性差の是認という自らの立場が性差別を肯定するものではないとの弁護を行う（性差別主義者でないことの弁解）。性差の強調もしくは「らしさ」の保持は、性差別を擁護しているのではないかという疑念を人々に抱かせかねない。そこでジェンダーフリー否定派は、性差別を肯定していないと弁解しつつ、性差の必要性を説くという綱渡りをしているのだ。こうしたリスクを冒す中で用いられるのが「人間の中性化」というフレーズなのだ。（風間 2007: 26）。

否定派の言説は、ジェンダーフリー教育が性差や「女／男らしさ」をなくし、その結果「中性人間」なるものを生み出す、という論理からなる。これが否定派の典型的な言説であり、そこには同性愛者やトランスジェンダーへのフォビアが背景にある。「ジェンダーフリーの行き着く先は同性愛の肯定」「『意識改革』の後に待っているのは“オカマの授業”」といった主張に端的に示されているように、ジェンダーフリー

教育や「過激な性教育」を批判する書籍には、同性愛（者）やトランスジェンダーへの嫌悪や恐怖（ホモフォビア／レズボフォビア／トランスフォビア）がしばしば顔を出す」（風間 2007: 23）。

このように否定派が言及している「中性人間」とは一体誰のことなのか。風間は、「第一五六回国会参議院 国民生活・経済に関する調査会」において参考人として呼ばれた深層心理学者の林道義の発言を分析して、次のように述べている。

すなわち、ジェンダーフリー教育によって「男女の区別がはっきり」しなくなると、「アイデンティティの確立」に支障が生じ、その結果異性との関係がうまくつくれなくなり、「同性愛に傾」く者が生まれ、子孫を残す行動に支障が生じるというのである。林は男／女というジェンダー・アイデンティティ（性同一性）に支障、すなわち「障害」をもつようになった結果、異性と性的に親密な関係を持つことのできなくなったセクシュアリティを同性愛として理解している。林にとって中性人間とは、性同一性障害と同性愛を重ね合わせた存在なのである。（風間 2007: 27 強調引用者）

否定派にとって、「中性人間」とは「性同一性障害と同性愛を重ね合わせた存在」なのである。その論理に従えば、ジェンダーフリー教育によって、ジェンダー・アイデンティティになんらかの「支障」が生じ、その結果、セクシュアリティが同性へと「傾

く」ことになるのであり、したがって、ここで語られている「中性人間」とはいわば「同性愛者」と「トランスジェンダー」の混合物なのである。だからこそ風間が述べているように、「ゲイやレズビアン、トランスジェンダーを「中性」と位置づけ「フォビア」を煽る性別二分法の枠組み自体を問題化する方向性を模索していく必要がある」（風間 2007: 31）のだ。

それでは、このような否定派の主張に対して、肯定派はどのように応じてきたのか。否定派が語る「中性人間」に、肯定派はどのような言説戦略を行ったのか。たしかに風間も述べているように、「こうした「フォビア」に対抗してジェンダーフリー肯定派は性的マイノリティを含む多様なアイデンティティを包含した「平等」を主張し、バックラッシュに対抗してきた」（風間 2007: 23）側面がある。しかし、風間が問題にしているように、否定派が語る「中性人間」あるいは「人間の中性化」については、肯定派は往々にして「否定形で語る」（風間 2007: 23）ことによって応じてきた。肯定派の主な主張は次のようなものだった。曰く、ジェンダーフリー教育は性差をなくすものではない、中性人間を作り出すものではない、「中性人間」は否定派が捏造したフィクションである、と。このような応答はしかし、セクシュアル・マイノリティへのフォビアを温存・再生産してしまう効果をもつものである。

現存する性的マイノリティと結びつけて語られる中性人間に対し、ジェンダーフリー教育はこのような人々を生

み出さないと、その存在を否定形で語ることは、否定派と肯定派との間で「中性人間は好ましい存在ではない」とする共通認識をつくりだすことになる。「女っぽい男」や「男っぽい女」、ジェンダー・アイデンティティに「支障」を生じた人間、同性愛の欲望をもつ人間、異性にあこがれをもたない人間は、ジェンダーフリー教育によって生み出されないと主張することになってしまう。(風間 2007: 30)

ここで問題なのは、「中性人間は好ましい存在ではない」とする認識が肯定派の言説においても温存されていることである。「性差をなくす存在」としての「中性人間」という形象は、「ジェンダーフリー教育は性差をなくすものではない」と肯定派が「否定形で語る」ことによって、肯定派の言説においても否定的な存在として温存されてしまったのである。

以上の考察から浮かび上がるのは、千田が語っていた「ポストフェミニズムとしてのトランス」がジェンダーフリー・バッシングの時代に生まれた「中性人間」という言説と構造的に重なっている点である。なぜなら、それらの言説のいずれにおいても、「トランス」や「中性人間」は「性差をなくす脅威」として否定的に表象されているからだ。また、両者の言説においてフェミニストと保守派の言説が奇妙にも一致してしまっている点も共通している。千田の「ポストフェミニズムとしてのトランス」という問題は過去のフェミニズムの負の遺産を継承・反復してしまっているの

ある。

本節での考察は、「ポストフェミニズムとしてのトランス」と「中性人間」それらの言説の構造的な重なりを明示するものであった。しかし、それは同時に、「中性人間」から「トランス」へのあいだにある差異や変化をも指し示す。ジェンダーフリー・バッシングの時代において排除の対象になっていたのは「同性愛者」と「トランスジェンダー」の「混合物」である「中性人間」だったが、現在、その対象は移行し、「中性人間」から「トランス」へと移っていると見えるかもしれない。次節では、このような歴史的な変化について考察する。

V. 「中性人間」から「トランス」へ

「中性人間」から「トランス」への歴史的変化を考察する上で、以下の鈴木みりの言葉をまず取り上げたい。鈴木は、2018年の杉田水脈の「生産性」発言に対する抗議街宣でスピーチを行った経緯について語っている箇所で次のように述べている。

メディアで「LGBT」という看板が使われるとき、それらアルファベットのどの属性に関する話題で、その文字の奥にいる「誰」にとって、そしてその「誰」の生活においてどのように、差別的な言動や社会構造が危機をもたらしているのか、見えないことが多い。数も声も大きいシスジェンダーの男性／女性であるゲイやレズビアンの人々の一部が、切実に解決を求める問題のためだけに自分の存在の一部を「T」として利用されなくなかった。可視化が

大事ともよく聞くけれど、望むと望まざるにかかわらず見た目や声から勝手に有徴性を拾われて「トランスだ」と名指しされ、可視化されている・しまう、それゆえの困難については意識すらされない状況は居心地が悪かった。(鈴木 2020: 38)

このような状況はディーン・スペイド (Dean Spade) の表現を借りれば、「LGB fake-T」と言える (Spade; Salamon 2010=2019)。鈴木が述べているように、「トランス」は「T」という頭文字で表面上は表象されながら、その社会的困難は不可視化される。「LGB fake-T」とはまさに、「数も声も大きいシスジェンダーの男性／女性であるゲイやレズビアンの人々の一部が、切実に解決を求める問題のためだけに」「T」が「利用」される状況を指すと言えるだろう。

また、例えば元参議院議員でゲイであることを公表している松浦大悟は、2019年1月5日のAbemaTV「みのもんたのよるバズ！」での発言などをはじめ、LGBT差別解消法案を批判するために、その法案を認めれば「男性器のついたトランスジェンダーを女湯に入れないと差別になってしまう」といった発言を繰り返している。ここでは、トランスは不可視化されているだけでなく、「危険な存在」としてスケープゴート化されていると言える。

アメリカ合衆国の文脈においてはあがあるが、スーザン・ストライカー (Susan Stryker) は同様のことを「クィア」という語の使用の変遷に即して次のように指摘している。

クィア・スタディーズはトランスジェンダーの課題を理解するのにもっとも適した場でありつづけている一方で、大抵クィアは「ゲイ」や「レズビアン」の婉曲表現になっており、異性愛規範とは異なる主要な手段としてセクシュアル・オリエンテーションとセクシュアル・アイデンティティを優先するレンズを通してトランスジェンダーの現象は大抵誤解されている。もっとも私が懸念しているのは、「トランスジェンダー」がますますあらゆるジェンダー・トラブルを含む場として機能していることであり、それによって、同性愛と異性愛をともに人格の安定した、規範的なカテゴリーとして保証するのに用いられていることである。これは壊滅的で、隔離的な政治的な帰結である。これと同じ論理が、現在、反同化主義的な「クィア」ポリティクスを、より口当たりの良いLGBTの市民権運動へと変質させている。(Stryker 2004: 214)

ここでストライカーが指摘しているのは、「ゲイ」や「レズビアン」の影でトランスが不可視化されているとともに、トランスの存在が「ジェンダー・トラブル」とみなされることで「同性愛と異性愛をともに人格の安定した、規範的なカテゴリーとして保証する」ためにスケープゴート化されるというトランスをめぐる二重の苦境である。そして、トランスを「ジェンダー・トラブル」として表象する後者の立場こそ、

先に言及した松浦の立場であり、本論で検討した千田の論考やトランス排除的なフェミニズムである。

このようなトランスをめぐる現状を概観すると、セクシュアル・マイノリティに対する排除的な言説がジェンダーフリー・バッシングの時代から変化している可能性を指摘することができるだろう。かつて「中性人間」と呼ばれていたものは、「同性愛者」と「トランスジェンダー」の「混合物」であった。当時において、「中性人間」は「性別をなくす」脅威として考えられており、そこでは「同性愛者」も「ジェンダー・トラブル」とみなされていた。しかし、現在において、排除的言説はより明示的に「トランスジェンダー」を標的にしたものに変化しつつある。そして、そこで標的にされている「トランスジェンダー」のイメージこそ「ポストフェミニズムとしてのトランス」である。

そこで想像される「トランス」は、身体やアイデンティティを自由に再構築し、「たまたま、「割り当てられた」身体やアイデンティティを変更して何の不都合があるだろうか」（千田 2020a: 251）と居直ってみせる主体である。Twitter上のトランス排除的言説においてしばしば引き合いに出される尾崎日菜子のツイート「あたしとか、チンコまたにはさんで、「ちーっす」とかかって、女風呂は行ってんのやけど、意職が低す

ぎ？」は、まさにこのような「ポストフェミニズムとしてのトランス」を言語的に表したイメージである³。逆に言えば、トランス排除派にとっての「トランス」とはまさにこれなのである（あるいはさらに言い換えれば、尾崎のツイートはトランス排除派が想像するトランス像を結果的に暴くものだったとも言えるだろう）。実際には、このツイートは「クエアな友人」が自らの「Xジェンダー性にナーバスになっていたので別の視点を導入するため」という文脈で語られた「冗談／フィクション」であり、また尾崎は「フィクションであっても、その後、こちらの意図とは違う別の混乱を招いてしまったことについては謝罪」している⁴。そして、実際の経験に関しては次のように述べている⁵。「例えば、旅行先ではシャワーの個室のある部屋に泊まったり、予め予約の時にトランスであることを告げ、大浴場の営業後に浴場を使わせてもらったりしています。それでも、宿を予約する時、入浴に難色を示されることがあります。その時はどんなに泊りたい宿でも、宿を代える場合もあります」。「また、銭湯に行きたいことも多くありますが、多くの場合、事前に電話で問い合わせると、それとなく断られます。入ることができたとしても、着衣での岩盤浴などです」。これらの経験の方がずっとトランスの「リアル」を伝えるものと思われるが、しかし、トランス排除派に

3 尾崎のこのツイートに関する重要な考察として、清水 2020 を参照。

4 詳しくは、twitter.com/hinakoozaki/status/1111895157295579136?s=20 を参照。

5 以下の尾崎の一連のツイートに関しては、「トランスジェンダーが自分自身を説明する際に要するコストと、回答を求めるものとのコストの非対称性について」（2021年4月2日取得、<https://togetter.com/li/1245003>）を参照。

としては「チンコまたにはさんで、「ちーっす」の方こそが「トランス」の「リアル」なのである。それはそのツイートの文脈はもちろん、そのツイートの語り主である尾崎自身からさえも離れて、「これこそがトランスだ」という「リアル」を構成していく。このような「^{リアル}現実」の上書きによって、実際のトランスの生きられた経験や語りは「なかったことにされて (derealized)」いく。

「ポストフェミニズムとしてのトランス」(あるいはより広く一般にトランス排他的な言説) のもっとも破滅的な効果とはこのような「^{リアル}現実」の上書きである。それはジュディス・バトラーが「非現実化=なかったことにすること (derealization)」と呼んだものである。

^{アンリアル}非現実だと言われること、そう呼ばれること [.....] は、人間なるものがそれを引き換えに作られるところの者(あるいはモノ)である他者になることである。[.....] コピーと呼ばれること、^{アンリアル}非現実と呼ばれることは人が抑圧される方法の一つだが、しかし、考えてみてほしい。抑圧されるということは、あなたはなんらかの主体としてすでに存在していること、支配的な主体に対して可視的で抑圧された他者として、少なくとも可能的、潜在的には主体として存在していることを意味する。しかし、^{アンリアル}非現実であることはそうではない。抑圧されるには、あなたはまず理解可能であらねばならない。あ

なたが根本的に理解不可能だということ [.....] を見出すことは、あなたはまだ人間へのアクセスをもっていないことを見出すこと、あなた自身が^{あなた}あ^たかもただ人間であるかのようにつねに語っていること、しかし、あなたはそうじゃないという感覚をもって語っていることを見出すこと、あなたの言語は空虚であり、どんな承認もやってはこない、なぜなら承認が生じるところの規範はあなたのためには存在しないから、ということを見出すことである。(Butler 2004b: 30 強調原文)

この記述はまさにトランスが置かれている現在の状況を照射しているだろう。「ポストフェミニズムとしてのトランス」という幻影がトランスの「^{リアル}現実」になるとき、トランスである^{あなた}あなたの語りは「^{アンリアル}非現実」の烙印を押され、「なかったことにされる」。そこでは、その幻影の方が^{あなた}あなたの具体的な存在や経験よりも「^{リアル}現実」として優先されるからである。トランスの「^{リアル}現実」が上書きされるとき、「私はあなたの隣で生きている」というたったそれだけの「^{リアル}事実」が政治的な争点になる。それは、トランス排他的な言説において、トランスが「人間」へのアクセスを奪われ、その「生きている」という「^{リアル}現実」が「なかったことにされる」からである。だからこそ、そのような暴力に対して声をあげるトランスたちは、^{あなた}あ^たかもただ人間であるかのように語りながら、しかし「私」は「そうじゃないという感覚を

もって語っていること」を見出さざるをえない⁶。「ポストフェミニズムとしてのトランス」とは、トランスの「^{リアル}現実」を上書きする「非現実化」の暴力である。

VI. おわりに

現在、トランスにとって、「フェミニズム」も「LGBT」も十分には「安全なスペース」（あえてこの表現を用いよう）足りえていないのが現状である。とりわけ、「トランス排除的ラディカル・フェミニズム」の言説に触れて、「フェミニズム」に自らの居場所はないのだと感じるトランス当事者は多いだろうと推察される。これが「フェミニズムの現在」の姿なのか——トランスの傷や痛みを後回しにし、黙殺し、さらにはその傷を抉りさえするフェミニズムが？そしてたしかに、それが「フェミニズムの現在」の「一側面」なのだと言わざるを得ないだろう。

しかしながら、フェミニズムのすべてが

「トランス排除的なフェミニズム」であるわけではもちろんない。むしろ、フェミニズムは「ともにあるためのフェミニズム」でもあった／ある。フェミニズムは「女たち」内部の多様な差異をいかに思考し、そして、いかにして「私たち」が「ともにある」ことができるかを模索してきた思想であり、運動である。なぜ、このようなインターセクショナル・フェミニズムの系譜⁷があるにもかかわらず、トランスはフェミニズムの「敵」であるかのように考えられているのか。そこに「フェミニズムの未来」があるとは到底思えない。むしろ、「フェミニズムの未来」とは、これまで「ともにある」ことを模索してきたフェミニズムの歴史的实践のなかにこそあるのではないだろうか。「私たち」がなすべきことは、その系譜を手繰り寄せ、現在に結びつけていく実践である。

参考文献

- Ahmed, Sara, 2016, "An Affinity of Hammers," in *TSQ*, vol. 3, no. 1-2: pp. 22-34.
- Butler, Judith, 2004a, "Endangered/Endangering: Schematic Racism and White Paranoia," in Salih, Sara & Butler, Judith ed., *The Judith Butler Reader*, Singapore, Blackwell Press: pp. 204-211.
- . 2004b, *Undoing Gender*, New York and London, Routledge Press.
- 藤高和輝, 2019a, 「後回しにされる「差別」——トランスジェンダーを加害者扱いする「想像的逆転」に抗して」『Wezzy』(2021年1月2日取得, <https://wezz-y.com/archives/67425>).
- . 2019b, 「感じられた身体——トランスジェンダーと『知覚の現象学』」『立命館大学人文科学研究紀要』120号: pp. 217-231.
- . 2020, 「インターセクショナル・フェミニズムから／へ」『現代思想』48号, 4巻: pp. 34-47.
- 風間孝, 2007, 「「中性人間」とは誰か? ——性的マイノリティへの「フォビア」を踏まえた抵抗へ」

6 夜のそら: Aセク情報室が語っている「未来からの産業廃棄物」という比喩はこの感覚を表現しているように思われる(夜のそら: Aセク情報室2020)。

7 この系譜に関しては、拙論(藤高2020)を参照。

- 『女性学』15号：pp. 23-33.
- 菊池夏野, 2019, 「憧れと絶望に世界を引き裂くポストフェミニズム——「リーン・イン」、女性活躍、『さよならミニスカート』」『早稲田文学』21号：pp. 4-12.
- 酒井隆史, 2016, 『暴力の哲学』河出文庫.
- Salamon, Gayle, 2010, *Assuming a Body: Transgender and Rhetorics of Materiality*, Columbia University Press. (= サラモン, ゲイル, 2019, 『身体を引き受ける——トランスジェンダーと物質性のレトリック』以文社.)
- 千田有紀, 2020a, 「女」の境界線を引きなおす——「ターフ」をめぐる対立を超えて」『現代思想』48号, 4巻：pp. 246-256.
- . 2020b, 「女」の境界線を引直す意味——『現代思想』論文の誤読の要約が流通している件について」(2021年4月4日取得, <https://note.com/sendayuki/n/n62aebf2fcd7e>).
- 清水晶子, 2020, 「埋没した棘——現れないかもしれない複数性のクィア・ポリティクスのために——」『思想』第1151号：pp. 35-51.
- Spade, Dean, “Remarks at Transecting the Academy Conference (rough notes),” (Retrieved January 9, 2021, <http://www.makezine.org/transecting.html>).
- Stryker, Susan, 2004, “Transgender Studies: Queer Theory’s Evil Twin,” in *GLQ: A Journal of Lesbian and Gay Studies*, vol. 10, no. 2: pp. 212-215.
- 杉田水脈, 2018, 「「LGBT」支援の度が過ぎる」『新潮45』436号：pp. 57-60.
- 鈴木みのり, 2020, 「取るに足らないおしゃべりの中から」井上彼方編『私・からだ・社会についてフェミニズムと考える本』社会評論社：pp. 33-42.
- 夜のそら：A セク情報室, 2020, 「未来人と産業廃棄物——千田先生の「ターフ」論文を読んで」(2021年4月5日取得, <https://note.com/asexualnight/n/n8ef173987d74>).
- ゆな, 2020, 「千田有紀「女」の境界線を引きなおす：「ターフ」をめぐる対立を超えて」(『現代思想』3月臨時増刊号 総特集フェミニズムの現在』)を読んで」『ゆなの視点』(2021年1月2日取得, <https://snartasa.hatenablog.com/entry/2020/02/20/034820>).

(掲載決定日：2021年5月14日)

Abstract

Trans as Postfeminism?: Critically Reading Transphobic Discourse in Japan

Kazuki FUJITAKA

This article clarifies the structure of transphobic discourse in Japan, focusing on Yuki Senda's "'Onna' no kyokaisen wo hikinaosu"(2020), a text constantly criticized for its transphobic description since its publication. A critical reading of the article indicates its disclosure of the epistemic framework of trans-exclusionary radical feminism in Japan, or "trans as postfeminism." According to this worldview, transgender people deny feminism because they represent the elimination of the differentiation of biological sex. This analysis of Senda's article reveals the mechanism of transphobic epistemology in trans-exclusionary radical feminism. In so doing, it highlights the importance of an intersectional perspective and the necessity of trans-inclusive feminism.

Keywords

transgender, imaginary inversion, postfeminism, LGB fake-T, intersectionality